

す。その戦闘の激しさを聞き、今もって私は入隊した歩兵第二二二連隊に心を残し転移したこと、戦友も同級生も今は亡く、かつての航空教育隊の同年兵の集まりにも参加したことはありません。生き残って四十余年、何か戦友に思いが残ります。

戦記より知った私の思いを申します。部隊は北支那より南下し、ビアク島で玉砕した戦友の激戦の話、生還した友の話や戦記を読む度に、かつての下士官候補生集合教育の戦友の顔が、そして戦いの中の戦友のことを偲び、葛目連隊長以下戦友の御冥福を祈るばかりであります。

例えば、昭和十八年九月北支山西省での作戦を独立混成旅団に継承し、十月南京に移動、南方作戦の演習の明け暮れの中、十一月二十三日呉淞を出港した部隊と別れて私は内地に、そして戦友たちはビアク島に十二月二十五日に上陸したそうです。

昭和十九年五月二十七日、三万の上陸連合軍を相手に激闘二か月、岩手県出身者の生還は僅かに四十名、下土候魂で突入して行ったであろう戦友のこと。戦史

を読む度に泪し、哀悼の心は言葉に言い表わせず、唯々御冥福を心より記念いたします。

ビアク島に限らず全戦線がその通りのこと、戦後四十数年、生き残ったこと。戦友への思い、残れし人の戦友会にも、どうしても出られず、未だに参加したことがありません』

とありました。死ぬも生きるも国のため、父母兄弟を守るため、故郷を護るため、兵隊たちは純粹に戦い死んでいったのです。

## 台湾航空情報部隊

宮崎県 伊地知 薫

昭和十七年徴集、大正十一年三月二十五日、宮崎県西諸県郡旧飯里村（現日向市平岩）で九人兄弟の末子として生まれました。男子は第三子の兄と私のみ、他は姉七人ですが、私と兄は十七歳も違っていて、兄は父の跡を継いで郵便局長（集配区十二、三）をしてい

ました。

当時は、既に支那事変も勃発し、地方の青少年にも危機感があり、海外雄飛の風潮もありました。私も二年程、満州へ渡って満鉄に勤務しました。昭和十四年です。それから少年ですが、ノモンハン事件の時です。

赤十字のマークのある軍用列車で、全身包帯で巻かれた兵や、負傷兵を輸送したが、火傷者はソ連の火炎放射器の火傷だと薄々知りました。我が軍の戦闘で初めて火炎放射攻撃を受けた人たちです。

戦後、ノモンハン事件の悲惨さ、負け戦のことは知りましたが、その時は嚴重な緘口令が出ていて、上司や憲兵から「絶対にしゃべってはいけない」と厳しく言われていました。また、常時誰かが尾行しているような感じがし、陰で監視されていたようです。

火傷者らしい全身包帯の者は痛さのためかウンウンとうなっていたし、一部には銃砲弾でやられた兵隊もいた。私等は満鉄社員の義勇軍のようなもので、輸送が終われば、今度は高射機関銃や小銃を持って、二十四時間ぶっ通しの警戒勤務でした。家の中では寝られ

ず陣地で寝るのです。そんなことからマラリアになり体をこわし勤務に耐えられず、故郷へ帰ったわけです。

満州の水や気候に慣れなかった私ですが、故郷に帰ったお陰で、マラリアの熱病も治癒し、体力も嘘のように回復したので、台湾へ行くことにしました。勤務先は台湾総督府専売局布袋出張所で塩田のある所です。当時塩は専売でしたからです。現地での徴兵検査は第一乙種合格（甲種、第一乙種は現役）となり、昭和十八年四月八日、台湾第四部隊へ入営が決定して自家に知らせました。私は若い頃から他へ出ていたし、家も後顧の憂も無いのでサッパリとした気持ちで入隊することに決め、帰郷はしないつもりでいました。ところが、父から「母危篤帰れ」の電報がきましたので急遽帰宅しました。これは、父が私を呼び寄せるための偽電報だったのです。家では父母や兄弟皆元気で私の帰国を喜んでいるのです。父は「お前の武運長久を祈るため神社に参拝する」といって、水を浴びて潔斎しました。その後父は体に震えが来て床に就いてしまいました。三日程看病したのですがその甲斐も無

く死んでしまいました。血氣盛りの私には、親が子を思う心を汲み取れなかったわけです。昭和十八年四月といえば、戦局は悪化し、台湾へ入営して何処の戦場に行くか判らない。一生会えぬかも知れぬという父母の心は、子を持って初めて知って、申訳ないという気持ちでありました。

台湾の第四部隊は歩兵部隊で、三か月の初年兵教育を受け、一期検閲後経理室の当番を命ぜられました。

私は旧制中等学校卒業の前年の十二月に退学しているので、幹部候補生を受けることが出来ない。班長は主計下士官になれといいますが、主計下士官候補生のことなのです。

南京の経理下士官養成所（中支那経理部下士官候補者教育隊）は南京中央病院前にあり、入隊は昭和十八年の秋頃でした。台湾ばかりでなく、もちろん支那派遣軍各部隊の経理下士官候補が集合して、教育期間は一か年であるのを九か月に短縮され、所謂短期養成教育ですが内容は一人前の主計とし行動出来るまで仕上げられたのです。

卒業後は主計下士官勤務兵長となり、台湾の原隊へ復帰、その後、台湾第四五七〇部隊、台北の航空情報隊へ転属を命ぜられました。部隊長は広川少佐であり、私は藤熊隊（中隊）へ配属され西海岸の屏東へ移動、終戦までそこで勤務をし、屏東で伍長に任官しました。

航空情報部隊とは電波兵器の部隊で、電波を発信して敵機の侵入を知り、航空部隊へ通知し、迎撃に向かわせるとか、空襲警報を発令するとかの任務のために編成された新しい部隊です。台湾軍（第十方面軍）航空情報隊本部は台北にありますが藤熊隊本部は屏東、一個小隊を澎湖島と台湾南端のガラランビに配備し、他の数箇所には分隊が配置されていました。

屏東と澎湖島は海峡を挟んで電波を出し、敵機の侵入を知る、ガラランビの隊は南方から敵機が来襲するとブラウン管に機影が映るように海に向かって電波を出している。現在、船舶などで円型のアンテナを回しているが、あの初歩的なものです。また屏東—澎湖島間は、建物の入り口に赤外線を放射し、盗人の侵入を知る装置と同じような原理です。

私は主計下士官ですので本部で経理を見るばかりでなく、一か月のうち十五日ぐらいは各小、分隊へ、トラックで俵給や食料等を届ける。当時物資は比較的豊富でしたが、輸送は昼間出来ない。昭和十九年後期になると四六時中米軍機が上空を飛んでいる。道路は舗装していないので昼間トラックを走らすと砂ぼこりが立って敵機に発見される。従って夜間ライトを下向きにし暗くして走る。兵隊がトラックの前のライトの所に腰掛けて、運転手に手で合図しながら低速で進む。そのため一時間の所を三時間ぐらいかかりました。

後には焼くそになり、ドンドン飛ばしたこともありました。夜だけの運行では間に合わないのです。屏東の奥に横穴を掘り、携帯食料を貯蔵していました。そのため自動車は昼間使えないので水牛の車で運びました。空襲されぬよう間隔を二百メートルぐらい空け、木の枝などで偽装し五台で行ったのですが、片道二時間半ぐらいかかりますが敵機には発見されずに済みました。

現地人の人夫に日当を渡し、「必ず間隔をあけるよ

うに」と強く言ったのですが、彼等は油断したのか牛車五台を並べて帰ったので、途中敵機P38に発見され二人死亡、水牛も一頭死んだのです。死亡した者は台湾の現地人ですが、直ちに陸軍軍属として処遇しました。P38は優秀な飛行機で、口径が大きい機関砲が装備してあるので、当れば出血多量や臓器が飛び出してほとんど死亡してしまいます。行きは私が引率者だったので車に偽装し、車間二百メートルを必ず保ち、時々各車を確かめての行動でしたが、帰りは注意したのにそれを守らず犠牲者を出し、残念でもあり気の毒でもありました。

空襲は機銃掃射だけでなく、爆撃も段々と激しくなってきました。屏東では落下傘爆弾を投下され、風に流されながらユラユラと落ちて来るので精神的にも参りました。その後屏東は焼夷弾爆撃で、一坪に一個ぐらい落されたというからほとんどの街の家屋は焼失しました。

我々の隊は郊外の師範学校を使用して、地下壕を掘ってその中におり、兵舎には居なかつたので難をま

ぬがれ、犠牲はほとんどありませんでした。被害は市街地の一般住民で、その後屏東の被害については具体的な発表は聞かず不明でした。また屏東から南の鉄道は、敵が上陸して使わないようにと全部外しましたが、その時余り効果はないのではありません。

南方へ行く部隊は台湾を経由したので海峡や近海で随分やられている。また、南方で栄養失調になった兵隊を台湾に上陸させ、バナナをどんどん食べさせて体力を回復させたのを知っていますが、末期には台湾まで帰れる船が無くなったのではないかと思います。

日本の艦船が撃沈されたのは見なかったが、屏東飛行場空襲の時、我が軍の複葉練習機が上がっていき撃墜され、落下傘で降下してくる操縦士を、敵機が射っているのを目撃しましたが、我々はただハラハラするのみでどう仕様もありません。無事着地出来たかどうかは不明ですが、日本軍の航空隊は連合軍機と戦えぬ程少なくなっていました。

我々も危機感が強くなり、内地からの補給無しでも戦える準備をしました。幸いに台湾人の日本軍人に対

する感情は良かったので、物資の買入れは順調でした。乾燥野菜、大豆、乾魚など、私が自分で直接買入れ貯蔵し、それを横穴へ入れておく。そのためか部隊の兵隊の栄養は良好で、山口一等兵が熱病で死んだだけでした。

台湾軍は当時第十方面軍となり、沖縄の第三軍も隸下に入れ兵力は随分多く、元気な兵は沢山いました。台湾は無傷でした。また、通信網としては台湾全土に有線電話網があり、通信関係は二十四時間ぶっ通しで勤務、情報は直ちに全部隊に知らせることができました。我が情報部隊は方面軍直轄なので、空襲警報は直ちに出すことが出来ました。

沖縄の玉砕は一週間ぐらい後に知り、もう内地までの逃げ道は塞がれたと、危機感は益々強くなってきました。台湾本島は大きくとも本土とは陸続きではないが、兵の志気は旺盛だったが、昼間の半分は空襲警報発令であり、大きな部隊の移動は出来なかった。先に申した通り水牛の車五台でもやられるのですから。従って澎湖島への連絡や補給は不能になり、分遣され

た小隊は島の部隊から給与を受けるようになったので、私の補給範囲はガランピの小隊と、監視哨各五、六名ぐらいとなりました。

航空情報関係の技術者は台北の本部から来る軍属で、故障や据付け以外は皆屏東の中隊で兵隊が処置していました。しかし、戦争末期になるとガランピから海上に出す電波が逆探知され、敵機の道案内電波になってしまった。こちらが電波を出すと、我が軍の各部隊の位置が知られる。即ち、ガランピの電波を伝って行けば台湾へ行けるといふわけです。電波探知機は航空戦力あってこそ有効である。探知しても対戦機が無いので、単に空襲警報発令の役にしか立たなくなりました。

終戦まで、食料、物資、武器弾薬は豊富だったので敗戦を感じなかった。台湾軍は無傷だったからです。上官は敗戦情報は判っても、下士官以下は判らなかつた。終戦が判ったのは翌日のことです。十五日の玉音放送は曹長一人が聞いていたのです。「何か」と怒り、一人で泣いていた。我々は曹長が何故泣いているのか判りませんでした。

翌十六日、隊長が我々を集め終戦（敗戦）を発表した。その時はショックと同時に、日本に帰る希望が持てました。部隊の中の指揮系統は乱れなかつたが、しかし、台湾兵は除隊となり、一等兵以下は袴下と襦袢のみ支給、上等兵は軍服を着せて帰りました。その時「何故差別をするのか」と残念に思いましたが、上級の方からは「現地自活を何時までやらされるか判らない。軍服をそのための作業用などにあてるため」と説明を受け納得しました。

藤熊隊は総員百八十名ぐらい、そのうち台湾人及び現地入隊者（私も含め）三十六名が除隊しました。私は除隊して専売局へ帰りましたが、新聞には現地入隊者でも独身者は「元の部隊復帰」の記事がありましたので、私は藤熊中隊ではなく台北の本隊、広川部隊（第十方面軍航空情報隊）へ復帰したのです。

私たちは俘虜ということで、小学校講堂に藁を敷き、天幕を広げ、毛布をかけて寝ていました。毎日何人かが交替で台湾の使役をしていましたが、他の者は外出自由で拘束はされない。街では在留日本人が食うため

に着物や、内地へ持って行けぬ物などを露天で売って、金に替えていました。台湾人は皆喜んでそれを買っていたようで、邦人に迫害は加えなかったらしいし、治安、人心は安定していたでしょう。

昭和二十一年三月、いよいよ帰還が決まり広川中佐以下約百四十名は海防艦に乗船し帰国したのです。上陸した鹿児島街は焼けていて、柱だけのコンクリートの建物で休み寝たのですが、経理下士官は私一人なので、広川中佐以下百四十名ぐらいの給料計算を一睡もせずやって全員に給料を渡し、三月二十三日に復員解散しました。

私が駅に向かって帰る時、一人の軍曹が「他部隊から入ったので給与を受けていない」と言う。私の所にはその人の名簿はない。「上司から言われなければ、私の権限では給与は出せない」と言ったが、その人は乙種幹部候補生で東京の人だという。私は山の向こう（宮崎県）が故郷だし、お互いに軍曹だからと、私の給料をそっくり渡しますと、その人は非常に感謝してくれました。

故郷飯野町へ帰ったら戦災は受けなかったが、部落へ入る橋が水害で流されてしまっていた。丸太伝いに河を渡り家に着いた時は月が輝いていました。母は元気でいましたが、兄は部下の責任をとって郵便局長を辞任し不慣れた農作業をしていました。坊ちゃん育ちの兄は苦労知らずで、父の財産も散じていたので、父からの遺産の私の持分を兄に渡しました。

私は専売局員でしたが、台湾総督府の官吏だったので再就職は出来ません。しかし、姉二人は死亡したのですが、兄姉私と七人が健在にいることは誠に幸せであると、恩給欠格者のお世話をさせて頂いています。